

「二項対立のあらかじめ作られた図式」
(prefabricated schema of binary opposition) :
アフリカ・ウガンダNyoro 族の文化に関する象徴的
二元論についてのNeedhamとBeattieの論争によせて

松永, 和人

<https://doi.org/10.15017/2341053>

出版情報 : 九州人類学会報. 35, pp.46-67, 2008-07-12. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

研究ノート (特別寄稿)

「二項対立のあらかじめ作られた図式」
(prefabricated schema of binary opposition)
——アフリカ・ウガンダ Nyoro 族の文化に関する象徴的二元論についての
Needham と Beattie の論争によせて——

松永和人

キーワード：象徴的二元論 (二項対立)、サカサの呪力

目次

- I 序
- II Nyoro 族の文化に関する象徴的二元論についての Needham と Beattie の論争
- III 吉田禎吾・波平恵美子の長崎県岐勝本浦における右——左の象徴的対立の指摘について
- IV 「左」の習俗の呪術的機能——その「人類共通の文化的仕掛け」を求めて——サカサの呪力——

I 序

昨年 (2007 年) の『九州人類学会報』第 34 号に寄せさせていただいた研究ノートで、Needham がアフリカ・ウガンダの Nyoro 族の文化について認識している象徴的二元論の中には必ずしも対立とはとらええないことまで対立ととらえていることがあるのではないか、その意味で、Needham の Nyoro 族の象徴的二元論の指摘にいわば過剰意識といえることがあるのではないかと私が述べていることに関して、では、Nyoro 族の象徴的二元論に関する Needham と Beattie との間の論争についてはどのように考えるのか、という質問を受けた。そのことは、絶えず、私の念頭にあり続けていることであるが、その質問に答えるためには、Needham が “Right and Left in Nyoro Symbolic Classification” (*Africa* 37, 1967, 所収、Needham (ed.), 1973, に収録) で示している Nyoro 族の象徴的二元論を Beattie が “Aspects of Nyoro Symbolism” (*Africa* 38, 1968, 所収) で批判していること、さらに、

Needham がその編著 *Right & Left : Essays on Dual Symbolic Classification* (1973) の Introduction でその Beattie の見解に反論を加えていることを検討するのみならず、本格的には、Needham が前掲の論文を書くに当たって使用している Nyoro 族に関する古くからの文献を十分検討する必要があり、現段階では、到底、答えることのできないことであるために、その両者間の論争にふれることがなかったのであった。

というのも、Needham の掲げる (Needham 1967 : 447, Needham (ed.) 1973 : 328) 二項対立の “table of opposites” はいくつもの重要な点で誤った提示をし、誤った解釈をしていると Beattie が述べており (seriously misrepresented, misinterpreted, Beattie 1968 : 413, 415, 437, 439)、その具体的内容については、次の Needham と Beattie の論争の項に記すが、ここで、その一・二の事例を述べておけば、たとえば、Needham が対立するものとして示している (後掲の表参照) political rank (政治的役職、訳語は吉田禎吾 (敬称略。以下同じ) による。エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 194) と mystical office (神秘的職能) について、Beattie は、同一の人物がその両者を兼ね備えていることを指摘し、また、正常な (一人の) 誕生 (normal birth) が、色のシンボリズム上、白と結びつき、双子の誕生 (twin birth) が黒と結びついていることを Needham が指摘していることに関しても、Beattie は、双子の誕生が、誕生後、まず、黒にかかわるとともに、成長の段階にともなって、白にもかかわっていることを示して

いる。

このような Beattie の事実の提示に基づけば、Needham の掲げる “table of opposites” は成り立たなくなり、そのために、このことは、象徴的・二元論の研究上、その根幹にかかわる基本的な問題を孕んでいることになる。それ故に、Needham と Beattie との間の論争を軽々に結論づけることはできず、『九州人類学会報』第 34 号に寄せさせていただいた研究ノートにおいて、Beattie にふれることがなかったのであった。

以上のほか、幾多の点で、Needham と Beattie との間で、事実認識の相違および解釈上の相違があり、Needham が使用している Nyoro 族に関する古くからの文献について両者間の論争を詳細に検討しなくては、私の見解を述べることは不可能なのである。しかし、現時点で、私は、Needham の見解の中には必ずしも対立しているとは思えないことにまで対立しているとの過剰意識の面があり、Beattie の Needham に対する批判を十分検討してみる必要があるのではないかということを感じているのである。

私が『九州人類学会報』第 34 号で Needham の見解について述べたことは、Nyoro 族において、Needham が、幾多の事実の中に、左肩に魔法の棒を置いて不妊がなくなる (barrenness be gone) ように祈り、右肩に魔法の棒を置いて子供がさずかる (come children) ように祈るということに関して、ここにも、右——左の対立が表われている (an extreme and undeniable contrast of values associated consistently with the left and with the right. Needham (ed.) 1973: xxii. 以上の文中の contrast の訳語・対立その他の訳語は、吉田による。エルツ著、吉田・他・訳 2001: 196) と述べていることに関して、不妊がなくなるということと子供がさずかるということとは同一のことであって、ともに子供に恵まれるように祈る同じ呪術的機能の両者に右——左の対立が表われているとみなすことはできないのではないかということであったが、Needham の見解には、このように、対立ということのいわば

過剰意識の面もあるように思われてならないのである。Nyoro 族の象徴的・二元論に関する Needham の見解について本研究ノートに記すのは一面の指摘にとどまることではあろうが、以下、現時点で、Needham の見解について私が感じていることを記し、次に、わが国の文化の右——左のシンボリズムの研究に関する吉田禎吾・波平恵美子の長崎県壱岐勝本浦における右——左の象徴的対立の指摘についての問題点を述べ、さらに、右——左のシンボリズムの研究に関連して、今後、研究課題の一つになりうるであろうことを記してみたい。

II Nyoro 族の文化に関する象徴的・二元論についての Needham と Beattie の論争

「二項対立のあらかじめ作られた図式 (prefabricated schema of binary opposition)」(Beattie 1968: 439. 訳語は吉田による。エルツ著、吉田・他・訳、2001: 196)。これは、Nyoro 族の象徴的・二元論に関して Needham が示している二項対立についての批判の一つとして Beattie が述べている語句である。Needham は「この批判は大きく間違っている (This charge is very much at fault)」(Needham (ed.) 1973: xxi) と述べている。今日、私の知る限り、Beattie の批判はあまり注目されていないように思われるのであるが、私には、もう一度、Needham の所論に対する Beattie の批判を取り上げ、その是非を検討してみる必要があるように思われてならない。

その Beattie の批判に対する Needham の反論を吉田が簡潔にまとめ紹介している (エルツ著、吉田・他・訳 2001: 190-198) ので、以下に、まず、その吉田の文章を引用して述べ、そして、Beattie、Needham の論文にふれながら、両者の事実認識の相違、解釈上の見解の相違をみることにする。

さて、「ニーダムは、ビーティーが積年研究してきたニョロ王国について、文献によって、ビーティーが軽視していたその象徴体系を分析した」(エルツ著、吉田・他・訳 2001:

研究ノート (特別寄稿) : 「二項対立のあらかじめ作られた図式」
(prefabricated schema of binary opposition) (松永)

190) のであるが、Needham は「ニョロ族では、右と左の象徴的対立がいろいろな機会にみられる」(エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 191) と述べ、右——左の対立のみならず、さらに、次のような図式 (Needham 1967 : 447、Needham (ed.) 1973 : 328) を提示することによって、Nyoro 族の二項対立を見事に示している。

それに対して、Beattie は「この表で示唆されるほどの規模で、ニョロ族の象徴的思考に広い二元論性格を負わせることは民族誌から保証されない」「二元的象徴分類の原理はニョロ族の集合表象のきわめて狭い領域に関係しているに過ぎない」(Beattie 1968 : 438—439、エルツ著吉田・他・訳 2001 : 195) などと批判し、象徴的二項対立が Nyoro 族の思考を解きほぐすマスターキーではないことを述べている (Beattie 1968 : 439)。

Scheme of Nyoro Symbolic Classification

right	left
normal, esteemed	hated
boy	girl
brewing	cooking
giving (social intercourse)	[sexual intercourse]
king	queen
man	woman
chief	subject
good omen	bad omen
owner of land	hunter
health	sickness
joy	sorrow
fertility	barrenness
wealth	poverty
heaven	earth
white	black
security	danger
life	death
good	evil
purity	impurity
even	odd
hard	soft
princess	diviner
political rank	mystical office
Kitara—Unyoro	Bukidi
legitimacy	illegitimacy
normal birth	twin birth
cattle	chickens, sheep
milking	hunting

clothed	naked
shaven hair	long hair
barkcloth	animal skins
Nyoro language	alien dialect
civilization	savagery
royal endogamy	misalliance
fidelity	adultery
personal combat	murder
moon (beneficent)	sun (maleficent)
culture	nature
classified	anomalous
order	disorder

(Needham 1967 : 447、Needham (ed.) 1973 : 328)

なお、吉田は、なぜか、以上の Needham の表の 4 1 の対 (pairs) を 2 4 の対に短縮して掲げている (エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 194)。このように掲げる吉田の表には、Needham が対立するものとして示し、一方、Beattie はそのことを批判し、それらが同類 (akin) で、対立するものとはとらえないとしている cattle—chickens, sheep、また、色のシンボリズムにかかわって、Needham は対立するものとして示し、一方、Beattie は対立とはとらえないとする正常な (一人の) 誕生 (normal birth) ——双子の誕生 (twin birth) など、Beattie が問題を提起している重要な事柄が省かれていることが問題視されてならない。

ニョロ族の象徴的分類図式

左	右
女の子	男の子
王妃	王
女	男
凶兆	吉兆
病気	健康
悲しみ	喜び
不毛	多産
貧困	富
地	天
黒色	白色
危険	安全
死	生
悪	善
不浄	清浄

奇数	偶数
占い師	王女
神秘的職能	政治的役職
裸	着衣
野蛮	文明
太陽	月
自然	文化
変則的なもの	分類されたもの
無秩序	秩序

(エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 194)

以上のようなNeedhamとBeattieの論争の中で、Needhamの所論に対するBeattieの批判の一つとして、「二元的象徴対立の分析法は『二項対立のあらかじめ作られた図式』に頼っている」(Beattie 1968 : 439. エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 196) とBeattieが批判しているのであるが、Needhamは、「この批判はまちがっている。二項図式は特定の民族誌の分析の結果であり、その点で、それは、〈あらかじめ作られている〉ことはできない」(Needham (ed.) 1973 : xxi. エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 196) とし、次のような事例にも言及している。

「ニョロは、出産後男の子のあと産を家の戸口の右側に埋め、女の子のそれは左側に埋める。埋葬のとき、男の死体は右を下に横たわせ、女は左を下に横たわせる。これは、男が右に女が左に結びついていることを示し、対立原理はべつにあらかじめ作られてはいない。ニョロ族の占い師が患者の左肩に棒——(wand、魔法の杖。松永注)——を置いて『病気が治るように、悲しみが、不妊がなくなるように』と言い、それから患者の右肩に棒を置いて、『富よ来れ、子どもがさずかるように、長命と幸福に恵まれるように』と言う。ここにも右と左の対立が表われている。ニョロ族の神話に神が右手を挙げて、あれが天だと言い、左手を下に向け、これが大地だと言った。これらの例から、研究者のあらかじめ作った図式を押しつけたものではないことが明らかである。」(Needham (ed.) 1973 : xxi

—xxii. 文章は、吉田の紹介文による。エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 196)

この論述の中で、出産後の男の子の後産を家の戸口の右側に、女の子のそれを左側に埋めること、また、右手で天を指し左手で大地を指すといった場合などには、なんの問題もなく、右——左の対立がみられることはいうまでもない。

ところが、私が問題視したいのは、棒(魔法の杖)を左肩において不妊がなくなるように祈り、右肩に棒をおいて子どもがさずかるように祈るということはどうであろうか、ということである。Needhamは、その事実にも、右——左の対立を認識しているのであるが、不妊がなくなることは子供がさずかるということであって、その両者は同じことと思われる。それに、Needhamがその両者に右——左の対立を認識していることには疑問が持たれるのである。右肩と左肩に、ともに、子宝に恵まれるようにという同じ願いを祈るのに、どうして、そこに、右——左の対立を認識することができるのであろうか。Needhamは、二項対立は「特定の民族誌の分析の結果」と述べているが、不妊がなくなるということと子どもがさずかるという同一のことに、どのようにして「民族誌の分析の結果」、右——左を対立するものとする認識が生じてくるのであろうか。右肩——左肩にともに子宝に恵まれることを願う同一の呪術的機能に、右——左の対立ということはいえないのではなかろうかと思われる。この点にも、私には、Needhamの右——左に関する過剰意識が感じられてならないのである。決して対立しているとは思えないことにまで、Needhamが対立を認識していることには問題を感じざるをえないのである。そのことは、「民族誌の分析の結果」考えられることでなく、研究者としてのNeedhamが二項対立のいわば固定観念にとらわれているために、対立していない事実にもまでも、過剰に、「二項対立のあらかじめ作られた図式」を当てはめようとしているように思われてならない。そのことは、上掲の“Scheme of Nyoro Symbolic

Classification”の中のいくつかの対についてもいいうることはなかろうか。たとえば、すでに述べたように、cattle—chickens、sheepの間に、どのような意味で、それらを対立しているのとらえるのであろうか。Beattieは、Needhamが基づいている文献の著者が“sheep are akin to cows” (Needhamはcattleと記しているが、Beattieによれば、cow)と述べていることを引用し(Beattie 1968 : 435)、Needhamのように、それらを対立するものにとらえる民族誌上の確たる証拠はないことを述べている(Beattie 1968 : 435)。“akin”とは、同類、ということであって、それらが同類のものであれば、それらを対立するものにとらええないことはいうまでないことである。Needhamは、また、正常な(一人の)誕生が、色のシンボリズム上、白と結びつくのに対して、双子の誕生が黒と象徴的に結びついているとし、その両者間の対立を認識している(前掲の表参照)のであるが、その点、Beattieは、「双子の誕生後、最初の数日は『黒い期間』と呼ばれ、その後、数か月、『白い期間』とされている」(the first few days after the birth of twins are called “the black period” or “the time of darkness”; this is followed by a period of some months called “the time of whiteness” (Beattie 1968 : 418)と述べ、Nyoro族の儀礼に、黒と白の両側面(both black and white phases)があることを指摘し(Beattie 1968 : 418)、色のシンボリズム上、双子の誕生の黒との象徴的結びつきのみを認識することの誤りを指摘している(Beattie 1968 : 418—419)。色のシンボリズムにかかわって、Beattieは、さらに、服喪期間に関しても、「服喪期間の最初の数日—一男性の場合四日、女性の場合三日—は『黒い期間』、次の数週間、あるいは、数か月は、『白い期間』と呼ばれ、そのそれぞれの期間に、儀礼的に、喪主が頭髪を剃るのを『黒い剃り(black shaving)』『白い剃り(white shaving)』と呼んでいることを記し、このように、服喪期間(死)に関しても、色のシンボリズム上、排他的に、黒か白かとい

うことでなく、最初は黒と結びついていても、その後、白と結びついていることを示し、Needhamがそのことに言及していないと批判している(the first few days of mourning—four for a man, three for a woman—are called “the time of darkness”, concluded by a ritual shaving of the chief mourners’ heads, called “the black shaving”. The next few weeks (or months) of mourning are called “the white mourning”, concluded by “the white shaving”. These expressions of Nyoro colour symbolism, which Needham does not refer to, seem unequivocally to suggest that the birth of twins, and even mourning are not regarded as either exclusively “black” or exclusively “white”, but rather as having, at different stages, both aspects. Beattie 1968 : 418)。このように、双子の誕生や服喪期間(死)に関して、色のシンボリズム上、黒のみといった一元的な認識だけにとどまることの誤りを指摘し、双子の誕生後、まず黒と結びついていても、成長の段階にもなって、白ともかかわり、また、服喪期間(死)に関しても、最初、黒との認識であっても、後に、白と認識されるという事実に基づき、事柄の諸側面ないし各段階(aspects or stages of things or events)の考察の必要性を指摘し、一元的な事実の認識、つまり、象徴的に黒に結びつき、さらには、それが“impurity”、“inauspiciousness”であるということが絶対的な特質ではないことを述べている(auspiciousness and inauspiciousness are aspects or stages of things or events; they are not absolute qualities, Beattie 1968 : 415)。Needhamは、掲げる表において、双子の誕生および死にかかわって“black”とのみ記しているが、以上に引用したBeattieの指摘に基づけば、そのNeedhamの指摘は不十分で一面的な指摘といわざるをえない。双子の誕生および死に黒と白とがかかわっているのであれば、そのような場合、それらを対立するものにとらえることはできず、正常な(一人の)誕生—

一白、双子の誕生——黒、生——白、死——黒と読み取れる Needham の表には問題があるといわなければならない。そのほか、すでに述べたように、Needham は、political rank (政治的役職) と mystical office (神秘的職能) を対立するものとして示しているが (前掲の表参照)、その political rank と mystical office について、Beattie は、Nyoro 族において、「高度な政治的役職の者は神秘的職能者でもある (high political rank is a mystical office)」(Beattie 1968: 435)、「Nyoro の王は、神秘的であるとともに世俗的でもあり、その両者を兼ね備えている (the Nyoro king combines in his person both the mystical and the secular)」(Beattie 1968: 436) ことを指摘し、同一の人物が、そのように両性格を備えているために、political rank と mystical office を対立するものにとらえることに疑問を呈している。このように、政治的役職者が同時に神秘的職能者でもあって、同一の人物が政治的役職と神秘的職能を兼ね備えている場合、Beattie の指摘のように、その両者を対立するものにとらえることには疑問が持たれるように思われる。さらに、Beattie の掲げる幾多の事例の中から他の一例を示しておけば、Needham は、moon (beneficent) —— sun (maleficent) との二項対立を指摘しているが (前掲の表参照)、その点、Beattie は、太陽に関して、Nyoro 族において、太陽が、火や熱と同様に、“dangerous” であるとともに、“beneficent” でもあることを指摘している (Beattie 1968: 425)。つまり、Needham は、Nyoro 族における太陽が “maleficent” であるとのみとらえ、月の “beneficent” との二項対立を指摘しているのに対して、Beattie は、太陽が、月と同じく、“beneficent” でもあることを述べているのである。このようにして、Beattie は、いろいろな点で、Nyoro 族のシンボリズムにおいて二面性が示されている (both are expressed in Nyoro symbolism、Beattie 1968: 426) ことを述べ、Needham の所論に疑問を呈している。Beattie のそれらの指摘

に基づけば、Needham の掲げる moon (beneficent) —— sun (maleficent) などとの二項対立の指摘は一面的な指摘にとどまるものであり、そのような一面的な指摘に基づく Needham の表に十分な学問的価値を認めることはできなくなる。Beattie が問題提起をおこなっているこれらの点について、Needham は的確に答えているであろうか。吉田は、「ニョロ王国を直接調査したビーティーは、ニーダムのニョロの左右の象徴的分類に関する分析を批判した。これに対するニーダムの解答は、彼自ら編集した『右と左——二元的象徴分類』の序論で行っており、筆者——(吉田。松永注)——はビーティーの批判に対して、ニーダムは十分に答え、反論していると思う」(吉田 1983: 256) と記している。今後、Needham と Beattie との間の論争をさらにくわしく検討しなくてはならないが、現在のところ、私には、そのようには思えない。以上のような Beattie の指摘に基づく場合、Needham が対立しているものとらえているものの中には対立しているとみなすことのできないことがあるのではないかといった問題があり、いくつかの点で、Needham のいわば過剰意識ということが感じられてならないのである。Beattie の述べるように、「ニョロ族の象徴的思考に広い二元論的性格を負わせることは民族誌から保証されない」ことも想定され、もう一度、Needham の所論に対する Beattie の批判を検討してみる必要があるように思われてならないのである。事実認識上、決して、「二項対立のあらかじめ作られた図式」の固定観念にとらわれてはならないことはいうまでもないことである。

Needham と Beattie との間の論争の一つに、二項対立は観察者の心の中であって (in the mind of the observer)、そのような二項対立の図式を Nyoro 族に押しつけているのではないか (Beattie 1968: 415 注 1. エルツ著吉田・他・訳 2001: 193) といった論争もあり、この点、Needham は「こういう考え方自身理解を妨げるもの」(Needham (ed.) 1973: xix. エルツ著吉田・他・訳 2001: 193.

くわしくは、エルツ著吉田・他・訳 2001 : 193-195 参照) で、決して押しつけではないとしている (Needham (ed.) 1973 : xix-xx)。しかし、魔法の棒を左肩におき不妊がなくなるように祈り、その棒を右肩において子どもにめぐまれるように祈るという同じことを対立と認識していることなどには、対立ということについての過剰意識が心の中にあるのではないか、ということが感じられてならないのである。その意味で、観察者(研究者)の心の中にあるのかもしれない「二項対立のあらかじめ作られた図式」の固定観念にとらわれてはならないことはいうまでもないことである。以上に述べたことは、Needham の論述全体からいえばごく一部のことはあろうが、たとえ、一部のこととはいえ、対立ととらええないことにまで対立を意識し提示することはあってはならないことであろう。

なお、従来は、右—左の対立ということに研究の焦点がおかれてきている。しかし、右—左の問題は、対立ということのみではない。たとえば、Kruyt によれば、Toradja 族において、右が生にかかわり、左が死にかかわり、その限り、右=生、左=死の象徴的対立が指摘される (right=life and left=death, left means death, right brings life and left brings death, Needham (ed.) 1973 : 81, 83, 84)。ところが、稲の収穫後、あたかも脱穀するかのように、稲束を左の肘で七回つついて稲から栄養的価値を奪い去る魔を無害化し、右肘で七回つついてその栄養的価値を強化する (Needham (ed.) 1973 : 86) ということもあるのである。このような場合、右=生、左=死という二項対立ということだけでは理解されえず、右—左が上述のような意味における相補的關係にあることも十分考慮に入れられなければならない。そのような場合、死をもたらし死を意味する左が魔バライの呪術的機能を果たしてもいることをどう解釈するかが問題となる。Toradja 族において、左は死にかかわっているだけではないのである。上にみたような呪術的機能を果たしていることも重要な事実

であり、要するに、それらを含めたその全体において理解されなければならないことはいうまでもないことである。つまり、対立ということだけでとらえることはできないこともあるのである。対立していないことは、表 (table of opposites) に表わすことはできない。

以上の点に関連し、山口昌男が「構造論的アプローチは、ともすれば、二元論のパラダイム表の提出に終わって平板にとどまる可能性を含んでいる」(山口 2000 : 192) と述べていることが留意される。その場合、構造とは、「基本的に対立する諸項の組み合わせとして捉える」(山口 2000 : 60) ののであるが、対立ということのみを意識しては、このような Toradja 族における右—左の事例など十分に理解されえない。また、前述の Beattie の述べる Nyoro 族において、双子の誕生が象徴的に黒に結びつき、その後、子供の成長にともなって、白に結びつき、双子の誕生に黒と白とがともにかかわっていることを黒と白とを対立するものとして示す二項対立の表 (table of opposites) に表わすことは不可能なのである。そのために、Needham の提示する表のような表化には限界があるといわなければならない。すでに述べたように、Needham は、提示する表において、双子の誕生にかかわって “black” とのみ記しているが、Beattie の指摘に基づけば、子供の成長にともなって、“white” とも記す必要があるのであって、その意味で、Needham の掲げる表には問題があるといわなければならない。色のシンボリズム上、死にかかわって、服喪期間が、まず、「黒の期間」とされ、その後、「白の期間」とされ、儀礼的に、喪主が頭髪を剃るのを「黒い剃り」、「白い剃り」としているということもあった。この場合も、服喪期間 (死) にかかわって、黒とのみ記すことはできないのである。

Needham の掲げる前掲の表自体についても、Needham と Beattie との間に見解の相違がある (Needham (ed.) 1973 : xxx)。この点、吉田が簡潔に紹介している (エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 197) ので、次に引用しておく。

「ビーティーは、<左>の欄にタテに並んだ諸項目をひとからげに結びつけて全部<不吉>を表わすものとし、<右>の欄の諸項目をすべて<吉>と理解しているようであり、そして左の欄の諸項目が<不吉>でないということから二元論を否定しているが、これは完全な誤解に基づくものである。左右二列の表は、ニョロの思考体系の全体的・組織的叙述ではなく、それは分析の過程で設定された一連の対立を、便利で適切な形で要約したものに過ぎず、『論議の累積的な結果の想起を助ける便利な表』である。」

Needham は、このように述べているのであるが、しかし、Nyoro 族において、右が男性・吉などに結びつき、左は女性・凶などに結びついている (the right is associated with the king, chiefs, landowners, men, masculine tasks, civil behaviour, and good omens; the left is associated with the queen, subjects, interlopers, women, feminine tasks, sexual activity, and bad omens. Needham 1967 : 429, Needham (ed.) 1973 : 305) といった Needham の認識の仕方に基づく以上、Needham の掲げる表の見方は、Beattie のようにみるのが当然なのではなかろうか。つまり、表の右欄と左欄のタテの諸項目は、それぞれ、シンボリカルに結びついているとみるのが当然なことと思われる。今後、さらに、検討されなければならない。

なお、Needham は、“complementarity (相補性)” をキーワードとし、“complementary opposition (opposite)” とくりかえし述べている。

ところが、“complementary” ということと “opposition (opposite)” ということとは、基本的に異なることと考えられる。

その点、Toradja 族について述べれば、右 = 生、左 = 死ということでは、その両者が明らかに対立 (opposite) していても、収穫後の稲束を左の肘でつついて米の栄養的価値を奪う魔を無害化し、右の肘でつついてその

栄養的価値を強化するということでは、右—左は、まさに、相補的 (complementary) 関係にあるのである。

“complementary” とは、相補うということであって、対立していることではない (そのことは、幾多の辞典に示されている。たとえば、勝俣銓吉郎編・研究社刊『新英和活用大辞典』には、「補いの、補充の」とある)。

たしかに、Needham の研究した Meru 族では、右手を重視する世俗的 (政治的) リーダーとしての長老と左手を重視する宗教的リーダーとしての Mugwe とが対立するとともに、Meru 族全体の統治の上で、相補的関係にあるであろう。そのために、右—左が “complementary opposition” の関係にあることは理解される。しかし、そのような Meru 族の研究から導き出された解釈上のキーワードとしての “complementarity” ということをあらゆる場合に適応し “complementary opposition” と述べることはできないのではなかろうか。Needham 自身、“complementary opposition between order and disorder” (Needham 1967 : 446, Needham (ed.) 1973 : 327) と述べ、また、用語上、おそらく Needham の影響かとも思われるのであるが、Beattie も、“complementary opposition of black and white”, “complementary opposition between the auspicious and the inauspicious” などと述べている (Beattie 1968 : 433)。どのような意味で、秩序—無秩序、黒—白、吉—凶の間に相補性を認めうるのであろうか。Needham も、Beattie も、*Oxford English Dictionary* を参照し “complement” の用語を “completes or makes perfect” “completes a whole” などと述べている (Needham 1987 : 88, Beattie 1968 : 434)。Needham は、また、“complement” の語句が “to fill up” などの意味するラテン語の “complementum” に由来していることを述べている (Needham 1987 : 89, くわしくは、Needham 1987 : 88—89 参照)。どのような意味において、排他的に正反対で対立している秩序—無秩序、黒—白、吉—凶の間に完全性・全体性 (perfect, whole)、また、相補性

(complementarity)を認めうるのであろうか。その場合の完全性・全体性・相補性とはどういうことなのであろうか。それらは、相互に排他的に対立している(mutually exclusive contrast)のではなからうか。Needhamは、
“mutually exclusive contrasts such as right—left, male—female, fertility—barrenness, sky—earth etc.”

(Needham (ed.) 1973 : xxii)とも述べているが、相互に排他的に対立しているそれらの間に、どのような意味において、相補性を認識することができるのであろうか。“complementary”という用語を、あまりにも、安易に使用しているように思われてならない。

この点、古野清人も、「対立する一対の用語が、補足し合う二元論の原則」(古野1972b : 34)と述べているが、「対立する一対の用語」が、あらゆる場合に、「補足し合う」のではないのではなからうか。

なお、Beattieは、Needhamの掲げる上記の表にみる barkcloth—animal skins などについて述べる“complementary opposites”にかかわって“their terms are hardly complementary in the ordinary sense of that word”とも記している(Beattie 1968 : 435)ことが留意される。

その“complementary opposites”の用語は、E. E. Evans-Pritchardも、Needhamの*Right & Left : Essays on Dual Symbolic Classification*に寄せているForewordの中で、“complementary opposites e. g. , dark and light, hot and cold, good and bad, and so on. Right and left are such a pair”

(Needham (ed.) 1973 : x)と記している。どのような意味で、dark—light, hot—cold, good—bad, right—leftなどの間に“complementary”の意味を認めうるのであろうか。そのような場合には、

“opposite”ということのみで十分なのではなからうか。前に述べたように、Meru族における世俗的(政治的)リーダーとしての長老と宗教的リーダーとしてのMugweとの間のように、その両者が“complementary”

な関係にあるとともに、“opposite”の関係にあるような場合には、“complementary opposite”ということがいえるであろう。しかし、一方、Needham自身述べるように
(Needham (ed.) 1973 : xxii)、相互に排他的対立をなしている right—left, male—female, fertility—barrenness, sky—earth などの間に、どうして、

“complementary opposite”を認識することができるのであろうか。Needhamは、“complementarity”ということ解釈上の中心概念とし、“complementary opposition (opposite)”とくりかえし述べているのであるが、相互に排他的なもの間では、“opposite”という用語のみで十分なのではなからうか。再度述べれば、“complementary”という用語は、もっと、限定的に使用されるべきではなからうかと思われてならない。

Hertzが「右手」—「左手」:「浄」—「不浄」の象徴的二項対立を述べている「右手の優越—宗教的両極性の研究—」(La Prééminence de la main droite : étude sur la polarité religieuse—)の副題にいう「両極性(polarité)」に“complementary”との概念は到底考えられない。Needhamは、Hertzのその「右手の優越—宗教的両極性の研究—」を、編著*Right & Left : Essays on Dual Symbolic Classification*の最初に掲げているが、その「両極性」ということとの関連で“complementary”の概念がいかにか考えられるかが問題とされなければならない。「エルツは左右相互の関係が互いに補いあっている点を見逃している」(エルツ著、吉田・他・訳 2001 : 220)とのNeedhamの見解を吉田が紹介していることから分かるように、Needhamは、前に述べたように、“complementarity”ということ解釈上の中心概念としているのであるが、そのことは、あらゆる場合に適応して考えられることなく、“complementary opposition (opposite)”でなくて、

“opposition (opposite)”ということ、Hertzの「両極性」ということでもってとらえるのがより適切な場合もあるのではなからうか。

以上、Beattie の論述についても、たとえば、双子の誕生、服喪期間 (死) など、色のシンボリズム上、まず最初に、黒にかかわり、後に、白にかかわることなどをいかに理解するかといったことなど、今後、十分に究められなければならないことがあるのであるが、本項を終わるに当たって、Needham が対立ととらえないことにまで対立を認識し、Beattie が Needham を批判して述べる「二項対立のあらかじめ作られた図式」との見解を再検討してみる必要があるのではないかということ、Needham の掲げる表のとらえ方、さらに、Needham の解釈の中心概念としての“complementarity”の使用上の注意点と思われることを記した次第である。なお、Nyoro 族において、占い師が占いに際して左手を使用する事実について、占い師が象徴的に女性、左に結びついているといった仕方での説明がなされているが、Beattie は、占い師の社会的位置付けに注目し、通常の人々に対して、占い師が、その一般の人々とは異なり、周辺 (境界線) 上にある事実に着目し考察しようとしていることも留意される。Beattie は、“he is different from, and marginal to, ordinary men, and so in a socially extra-normal status” (Beattie 1968 : 440) と述べている。このように、Beattie が “ordinary-marginal” の対立において理解する仕方を示唆していることも注目される。

III 吉田禎吾・波平恵美子の長崎県壱岐勝本浦における右——左の象徴的対立の指摘について

以上に述べた「二項対立のあらかじめ作られた図式」の固定観念ということは、日本国内における右——左の象徴的二元論の研究上取り上げなくてはならない吉田・波平の長崎県壱岐勝本浦における指摘についてもいうことのように思われる。

吉田・波平は、ともに、左の習俗を葬制上にみ、その文化的意味を、縁起が悪い、とのみ認識している。

吉田を指導者とした研究グループで勝本浦の研究調査を実施していた当時、私は、私個人で調査をおこなっていた調査地で、神に飾るシメ縄が左ナイであることなど、わが国の神祭りに左が重視されていることを知りえていたので、そのことを申し述べたのであったが、葬式にかかわってみられる左が神にかかわってみられるはずがない、私のいうことは全く当てにならない、信用できない、との言葉をいただいたのであった。

その後、一度だけ申し述べたことがあったが、いずれ、神にかかわる左の事実を知っていただけるものと思いき、二度と述べることはなかった。私は、都合で、その調査には、一時的・部分的にしか参加しなかったのであったが、数年後、機会があり、私自身で調べてみたところ、勝本浦の神社にも、シメ縄の左ナイなど、やはり、神祭りに左の事実がみられるのであった。それに、吉田は、Hertz の「右手の優越——宗教的両極性の研究——」以来、その Hertz の所論を台湾・高砂族 (高山族) の右——左の象徴的二元論の研究に適用した古野清人の「右」——「左」:「善霊」——「悪霊」の指摘など、左を悪、不浄、などと認識する従来の研究と軌を一にする見方で、左は悪・不浄などとの文化的意味合いであり、神祭りには右との観念で、当時、勝本浦において、船に乗せられた神輿が湾内を日マワリの右マワりにまわることのみを取り上げ、その神輿に飾られているシメ縄が左ナイであることなど、神にかかわる左の事実を調べてみることはなかったのであった。吉田は、上記 Hertz の『右手の優越——宗教的両極性の研究——』の和訳に寄せている解説で、「『右手の優越』に関するエルツの研究は実際には『左手の不浄性』の研究」(エルツ著、吉田・他・訳 1980 : 174、2001 : 185) と述べ、そのことは、長島信弘も指摘し (長島 1977 : 76)、また、Needham も、その編著 *Right & Left : Essays on Dual Symbolic Classification* の Introduction の中で、Hertz の研究に関し、“the essay on the superiority of the right hand is actually a study of the impurity of the

left side” と述べている (Needham (ed.) 1973 : xii)。吉田の指摘を含めて、わが国の文化の右——左のシンボリズムに関する指摘は、以上のような左の認識に基づいて、左の習俗を葬制上に認識し、左の文化的意味を悪、不浄、不祝儀、縁起が悪い、などということのみでとらえている。そのことは、Needham の資料の取り扱い方 (したがって、事実認識) に関して、Beattie が「取捨選択的 (eclectic)」 (Beattie 1968 : 415) と述べていることを想起せしめることでもある。吉田その他のわが国の文化の右——左のシンボリズムの研究者は、調査地の事実を十分に知ることなく、Hertz 以来の研究にみる左を悪、不祝儀、不浄、縁起が悪い、などとの文化的意味においてのみ認識する固定観念、換言すれば、Beattie の語句を借用して述べれば、右——左の習俗についての「あらかじめ作られた図式」を心の中に有しているがために、調査地における事実をその心の中に有している「あらかじめ作られた図式」に適合する事実のみ取り上げているという意味において事実を「取捨選択的」に取り扱っているといわざるをえないようにも思われる。

吉田の認識のように、勝本浦の祭事において、船の「日マワリ (右マワリ)」(「日マワリ」は、出漁の際などにもみられ、縁起の良いとの観念である) と葬式に際しての「逆マワリ (左マワリ)」(縁起が悪いとの観念) の「象徴的対立」(吉田 1979 : 242) が指摘されることは事実である。ただし、その指摘は一面に限られた事実についての指摘であって、神にかかわる左の事実をなんら取り上げることなく、そのような指摘にとどまっているのは、神祭りに右、葬式に左との「二項対立のあらかじめ作られた図式」の固定観念を心の中に有していたからだとは思われてならない。(今日、吉田は、私が指摘する日本文化に関する「聖」——「俗」: 「左」——「右」との象徴的二項対立を認めている。) 私の各地における調査結果では、神祭りに右、葬制に左ということだけでなく、神祭りと葬制とともに左の事実がみられ、そのことは、典型的には、神に飾るシメ縄が左ナイであるこ

とともにかつて土葬であった頃の棺縄 (棺をしぼる縄。今日の火葬では、棺をしぼることはしていない) がまた左ナイであったことや、田植えの前に、左巻きにしたノブドウの輪を畔に置き、輪の中の清浄な空間に田の神を招き、農作業の無事と秋の豊作を願うとともに、その同じ左巻きのノブドウの輪を魔オドシとして新墓に飾るという四国における事実の桂井和雄の報告 (桂井 1973) にみるように、その両者とともに左の事実がみられるのである。

さらに、私の調査結果から、二・三の事例を述べておけば、宮崎県の一山村で、毎年、神に奉納した神楽名を記録しておく神楽繰出帳が左トジであるとともに葬式に際していただく香典を記録していた香典帳がまた左トジであった (香典帳は、今日では、普通のノートを使用している)。さらに、大分県豊後高田市近郊農村における事例であるが、地鎮祭に際して砂を盛るときの鍬の持ち方が左手を先にし右手を後にして鍬を持っていた (現在では、必ずしもその習俗に拘泥してはいない) のと同様に、かつて土葬であった頃、墓穴に土をかけるときの鍬の持ち方が同じ持ち方であった。このように、左の習俗は、神祭りと葬制上とともにみられる習俗なのである。そして、そのような左は、世俗的生活活動における右との対置において認識されている。神に飾るシメ縄と棺縄の左ナイは、世俗的な経済活動としての農作業で使用する縄の右ナイとの対置においてそのサカサとして認識され、前掲の左トジは、世俗的生活活動上の右トジ (たとえば、日常生活上大福帳を使用していた際の右トジ。くわしくは、拙著参照) のサカサとして認識され、地鎮祭と葬制上とともにみられる左クワは、世俗的経済活動としての農作業で使用する鍬の持ち方が右手を先にし左手を後にする右クワとの対置において、そのサカサとして、認識されている。

このように、わが国の文化にみる右——左の習俗は、従来の指摘にみる「神祭り」——「葬制」: 「右」——「左」の象徴的二項対立ではないのである。神祭りと葬制上とともに

みられる左が世俗的生活活動における右との対置において認識されており、「聖(呪術・宗教的生活活動)」——「俗(世俗的生活活動)」:「左」——「右」の二項対立が基礎的事実として知られるのである。前述のように、吉田は、当時、神祭りにかかわる左の習俗を知ることなく、勝本浦における右——左の「象徴的対立」を述べているのであるが、さらに、私にとって不可解なのが波平恵美子の指摘である。

波平は、勝本浦において、

「『日まわり』は『魚が漁場に入り込む方向だ』といい、縁起の良い方向と考えられている。浦の祭の儀礼では日まわりの方向に三度回るということが繰り返し行われる。船の巡航その他、何か物を回す時は必ず日まわりである。年中行事や婚礼、家建て、船下しの祝いにおいて、また妊娠中の儀礼である『七月かぐら』や『ムカイかぐら』においても、日まわりが厳守される。それに対して、葬式および死者への供養の場では逆まわりが強調される。出棺の時、家の中で逆まわりに三回まわし、墓地に着くとやはり逆まわりに三回棺をまわしてのち埋葬する。円座になって清めの盃をやりとりする時も逆まわりである。逆まわりは左まわりでもあり、葬式においては左が強調されている。」(波平 1984 : 111-112)

と述べ、「日マワリ (右マワリ)」——「逆マワリ (左マワリ)」:「縁起が良い」——「縁起が悪い」との右——左の象徴的二項対立を指摘している。

同じ主旨の論述は同著の諸所にみられ、「勝本浦では、日常では物を左回りに回すことは決してしないが、葬式の場合は逆に、盃にしる料理にしる決して右に回さず、必ず左回しにする」(波平 1984:200)、「左まわり(『逆まわり』と呼ぶ)が葬式の場においてのみ用いられる」(波平 1984 : 174)「左まわりは死のカテゴリーにのみ限定され」(波平 1984 : 116)、「死の場面でしか用いられない左まわり」(波平 1984 : 117)、さらに、各地の左の

習俗に関しても、「左は、左膳や着物の左前などと同じく、死に関した場面以外には表現されない行動様式である」(波平 1984:209)、「葬式においてだけ左が強調される」(波平 1984 : 99)などと述べ、左の習俗を葬制上の縁起の悪い行動様式と認識している。(なお、波平は、勝本浦において、「魚が漁場に入り込むのが日まわりの方向であるから縁起が良く、台風の時風が吹き込むのは逆まわりだから縁起が悪い」と認識されていることも記している(波平 1984 : 56)。逆マワリというまでもなく左マワリのことであり、要するに、波平は、左の習俗を、縁起が悪い、とのみの文化的意味合いでとらえている。)

ところが、同著において、勝本浦における習俗として、

「進水式のお供え物はすべてトリカジから上げてオモカジから下ろす(左→右)。

『船たて』という船の底を焼いて船霊さまを清める儀式は今日では行わない。しかし、四〇年程前までは、船が小型の無動力船の時には松の落葉で船底を焼いていた。その時には船霊さまは船から下りていると考えていたようで、船底を焼いたあとは、船たてに使った竹で、トリカジ側の船のトモを三回叩いて、お乗り下さいと言っていたという。これは、船霊さまの位置、ないしは船霊さまが乗船する側をトリカジ側と結びつけて考えているのではないか。現在の船は、船霊さまを祀る棚を備えているが、それは船の前部甲板のトリカジ側である。」(波平 1984 : 165)

ということも把握し、進水式に際しての供え物をトリカジ(左舷)から上げるという左と神(船霊さま)とのかかわり、船底を焼いた後、トリカジ側を三回叩いて、船霊さまにトリカジ側から乗船していただくという左と神とのかかわり、さらに、トリカジ側の棚に船霊さまを祀るといった左と神とのかかわりなどの事実も記述している。

そのような事実を知りえていれば、左の習俗を葬制上に認識し縁起が悪いとの文化的

意味とのみみなすことはできないはずである。

着物の左前は、死者にそのように着せる事実が各地にみられるが、ところが、沖縄・久高島の祭り(イザイホー)において、神女が着物を左前に着ている(「祭りの時はヒダリカキ(左前)に着て」桜井編 1979: 37、比嘉 1989、嘉陽 1987)。また、左マワリは、勝本浦においては、葬式に際してのみみられる事実であろうが、しかし、たとえば、南九州の田の神祭り(田ノ神サマー)などに際してだけでなく、家の新築祝いなどに際してもみられる事実である(この点、拙著参照)。波平は、前に引用したように、勝本浦における左の習俗に関して、「葬式においては左が強調されている」と述べているが、「左が強調されている」のは、縁起の悪い葬制上においてのみでなく、縁起の良い神祭りや祝いに際してもみられる事実なのである。それに、波平は自分自身把握し記述している神(船霊さま)にかかわる左の事実をなぜか考慮に入れず、左の習俗を葬制上に認識し、その文化的意味を、縁起が悪い、とのみとらえ、「日マワリ(右マワリ)」——「逆マワリ(左マワリ)」:「縁起が良い」——「縁起が悪い」との右——左の象徴的二元論を述べている。そのことは、私には、不可解なことである。進水式に際しての供え物をトリカジ(左舷)から上げるといったことなど、左と神とのかわりを知りえているのに、どうして、「右」——「左」:「縁起が良い」——「縁起が悪い」、との象徴的二項対立の指摘だけでよいのであろうか。左の習俗の文化的意味を縁起が悪いとのみの認識において、波平自身把握し記述している以上のような左と神とのかわりについてはいかに考えているのであろうか。そのような左と神とのかわりを把握しながら、どうして、左の習俗の文化的意味を、縁起が悪い、とのみで認識することができるのであろうか。左と神とのかわりを知り記述しながら、波平の勝本浦における右——左の象徴的二元論の指摘で、左と神とのかわりの事実を解釈せず度外視していることは不可解といわざるをえない。勝本浦において、

たしかに、左マワリは葬制上にみられることであろう。しかし、左の習俗はまわることだけではない。シメ縄が左ナイであること、さらに、波平自身把握している船霊さまにかかわる左の習俗もみられるのである。左の習俗をまわることのみでとらえてはならない。

なお、勝本浦においては、漁場に浮かぶ水死体は、必ず、トリカジ(左)側のトモから上げ、置く場所もトリカジ側であり(波平 1984: 142)、トリカジ側のトモから陸揚げする(波平 1984: 162)。水死体は、死体の埋葬、寺での供養、船のお祓いなど、一定の手続きを経て、エビスに転化する(波平 1984: 57)のであるが、左が水死体と船霊さまにかかわっていることに関心が持たれる(水死体、おえべっさん、船霊さまに関して、「エビスと船霊」など、波平の著書参照のこと、波平 1984)。

勝本浦における右——左のシンボリズムの研究は、従来、吉田・波平が指摘している「右マワリ」——「左マワリ」:「縁起が良い」——「縁起が悪い」との象徴的二項対立ということだけでなく、このように、左が水死体と船霊さまにともにかかわっている事実の説明が重要なことではなからうか。

このような研究において、成立宗教としての氏神祭祀のみならず、いわゆる民俗宗教のレベルで、船霊さまにかかわる事実などを十分考察の対象にすべきであることはいうまでもないことである。

それに、従来の指摘は、成立宗教のレベルに関しても、一面の事実の認識にとどまっている。つまり、船に寄せられた神輿が勝本浦の湾内を日マワリの右マワリにまわることのみを取り上げ、その神輿に飾られているシメ縄が左ナイであることは考察の対象として取り上げていないのである。

吉田にしる、波平にしる、左の習俗を葬制上に認識し、左は縁起が悪いとの文化的意味であるとのみ想定し、Beattieの言葉を引用して述べれば、「二項対立のあらかじめ作られた図式」の固定観念——「右」——「左」:「善」——「悪」、 「祝儀」——「不祝儀」、 「浄」——「不浄」、 「縁起が良い」——「縁

起が悪い」、などといった Hertz 以来の研究 (わが国の研究者としては、古野清人の台湾・高砂族の研究、村武精一の千葉県下農村における指摘など) の流れにそって、勝本浦における左の習俗に関しても、左の文化的意味を悪、不祝儀、不浄、縁起が悪い、などとする固定観念——にとらわれているように思われてならない。

それは、左が神にもかかわってみられる調査地の勝本浦における事実から導き出された図式でなく、Hertz 以来の右=浄、左=不浄、右=善、左=悪、などとの認識に基づく「二項対立のあらかじめ作られた図式」の固定観念を心の中に有しながら、しかも、右—左の習俗を右マワリ—左マワリとまわることのみに認識する態度であったが故に、勝本浦における右—左のシンボリズムの指摘に関して、吉田のように、当時、神祭りにかかわる左の事実を知ることなく、また、波平のように、進水式に際しての船霊さまとトリカジ (左舷) とのかかわりなど左と神とのかかわりを把握しながら、左の習俗を縁起が悪いとのみの一面的な指摘に陥ってしまっているといわざるをえないように思われる。そのような指摘は、調査地の事実に基づく図式でなく、前もって心の中に有している「二項対立のあらかじめ作られた図式」に適合する事実をのみ取り上げているという意味において、Beattie が Needham について述べる「取捨選択的」という用語を借用して述べれば、事実の取り扱い方が「取捨選択的」といいうることなかもしれないのである。

つまり、シメ縄が左ナイであること、船霊さまの神祭りにかかわる左の事実などを考慮に入れず、「右」——「左」:「縁起が良い」——「縁起が悪い」という図式に適合する事実をのみ取り上げているからである。そのような吉田・波平の指摘に、どれほどの学問的価値を認めることができるのであろうか。調査地の勝本浦において、たしかに、「日マワリ (右マワリ)」——「逆マワリ (左マワリ)」:「縁起が良い」——「縁起が悪い」との「象徴的対立」がみられることは事実である。ただし、そのことは、勝本浦における右—左

の習俗の一面の事実の指摘にとどまるものである。

というのも、繰り返し述べることになるが、勝本浦において、神に飾るシメ縄が左ナイであるし、その他、波平自身把握し記述しているような神 (船霊さま) にかかわる左の事実もみられるからである。

前に述べたように、神輿が乗せられている船が勝本浦の湾内を日マワリの右マワリにまわることのみを考察の対象とし、その神輿に飾られているシメ縄が左ナイであるということなどを取り上げてはいないのである。そのような一面にとどまる指摘にどれほどの学問的価値を認めることができるのであろうか。

左ナイのシメ縄については、農村で、それが農作業に使用する縄の右ナイとの対置において認識されていることと同様に、漁業上使用する綱が右ナイであることとの対置において認識されていることを聞くこともあり、その場合には、右=世俗性、左=呪術・宗教性 (「聖」——「俗」:「左」——「右」) の象徴的対立が知られ、そのために、勝本浦における右—左の象徴的対立に関して、吉田・波平の指摘する「日マワリ (右マワリ)」——「逆マワリ (左マワリ)」:「縁起が良い」——「縁起が悪い」との象徴的対立とともに、「聖」——「俗」:「左」——「右」といった象徴的対立も知られ、複数の右—左の象徴的対立がうかがわれるようにも思われる。

そのために、吉田・波平の指摘は、一面の事実の指摘にとどまるものであり、そのような一面の事実にとどまる指摘に十分な学問的価値を認めることはできないと思われる。調査地における左の事実を十分知ることなく、また、神 (船霊さま) にかかわる左の習俗を把握しながら、なぜか、それらを考察の対象とせず、左の習俗の文化的意味を悪、不祝儀、不浄、縁起が悪い、などとのみ認識していることは、従来の右—左のシンボリズムの研究の流れに沿った「二項対立のあらかじめ作られた図式」の固定観念が心の中にあつたからだといえるのではなかろうか。そ

のようなことはあつてはならないことである。

勝本浦において、左の習俗は、葬式に際してみられるのみならず、シメ縄の左ナイ、また、波平自身記しているように、進水式に際して供え物をトリカジ (左舷) から上げることなど、神祭りにかかわってもみられる事実なのである。それ故に、左の習俗を縁起の悪い葬式上の行動様式とのみとらえることはできない。

Hertz の「右手の優越——宗教的両極性の研究——」以来、日本人研究者としては、古野清人が、台湾・高砂族 (高山族) の研究で、「右」——「左」: 「善霊」——「悪霊」の象徴的二元論を指摘し (古野 1972a)、その後、日本文化に関しても、たとえば、村武精一が千葉県下一村落における研究調査の結果、「右マワリ」——「左マワリ」: 「善」——「悪」、「祝儀」——「不祝儀」の象徴的二元論を述べている (村武 1984)。

このように、左を、悪、不祝儀、不浄などの文化的意味でのみとらえ、吉田も、波平も、前述のように、勝本浦における研究において、そのような研究の流れと軌を一にする「日マワリ (右マワリ)」——「逆マワリ (左マワリ)」: 「縁起が良い」——「縁起が悪い」との指摘をおこなっているのであるが、そのことだけの指摘では不十分なのである。繰り返して述べるが、わが国の文化において、左は、葬制にかかわるのみならず、神祭りにかかわり、祝いにもかかわり、左の文化的意味は、悪、不祝儀、不浄、縁起が悪い、との意味だけではないのである (くわしくは、拙著参照)。

以上、従来の象徴的二元論の研究に関して、Needham の Nyoro 族についての右——左の象徴的二元論、吉田・波平の長崎県壱岐勝本浦における右——左の象徴的二元論の指摘について私が問題と感していることを記した次第である。

それは、要するに、右——左のシンボリズムの研究が、「二項対立のあらかじめ作られた図式」のプレハブ (prefabricated) であつてはならないということである。

日本文化に関する従来の指摘について述

べれば、それは、調査地そのものの綿密な調査に基づくものでなく、他文化の、あるいは、国内であっても、他調査地での指摘をそのまま調査地に適用して述べたものであるということが感じられてならない。

そのような指摘のプレハブは避けなければならないことであることはいうまでもないことである。

日本文化においては、従来の指摘の「右」——「左」: 「善」——「悪」、「祝儀」——「不祝儀」、「浄」——「不浄」、「縁起が良い」——「縁起が悪い」、などといった象徴的二項対立でなく、左は、葬制にかかわるのみならず、神にも、祝いにもかかわり、「聖 (呪術・宗教的生活活動)」——「俗 (世俗的生活活動)」: 「左」——「右」の象徴的二項対立がその基礎的事実をなし、左が魔バライ・キヨメ、浄化などの呪術的機能を果たしてもいることが注目されなければならないということを、再度、述べておきたい。

IV 「左」の習俗の呪術的機能——その「人類共通の文化的仕掛け」を求めて——サカサの呪力——

私は、日本文化にみる左の習俗の事実の確認とその分析を通して、従来の指摘の「右」——「左」: 「善」——「悪」、「祝儀」——「不祝儀」、「浄」——「不浄」、「縁起が良い」——「縁起が悪い」、などとする象徴的二項対立でなく、「聖 (呪術・宗教的生活活動)」——「俗 (世俗的生活活動)」: 「左」——「右」の二項対立が日本文化における基礎的事実をなし、かつ、左が、右との対置において、そのサカサとして、魔バライ、キヨメ・浄化などの呪術的機能を果たしていることを明らかにした。

左ナイのシメ縄は、その内部を清浄な空間にしていることはいうまでもなく、また、南九州の田の神祭り (田ノ神サァー) において左マワリにまわるのも、水田 (祭りがおこなわれるのは春で、まだ水田に水を張っていない) の中央に安置している田の神の神像を祭る空間を清浄にするためとの認識なのであ

る。

そのほか、南西諸島で、子供の出産に際して、産室あるいは家の周囲に左縄を張りめぐらしたり、疫病が発生した際、村内に疫病が入ってこないように、村境に左縄を張っていたことがかつてあったことを聞くこともある。柳田國男は、百日咳で苦しいとき、左ナイの縄を緋い、それを左手で地蔵にかけ、そのような左でもって、病魔を払い、病気の治癒を願う縄掛地蔵の習俗を収録している(柳田 1963 : 451)。

呪術的機能ということに関して、さらに、日本文化における事実を幅広くみれば、たとえば、闘牛の盛んな鹿児島県徳之島で、闘牛の牛小屋に左縄を張っている事実もみられるし、宮崎県の一山村で、ムラの鍛冶屋が仕事場の周囲に左縄を張りめぐらしている事実もみられ、また、東京江戸川区で、ガラスの風鈴を製造している工場で、先代がガラスを溶かすために使用していた古いかまどに左縄を張りめぐらして大切に保管している事実もみられるのである。それらの事実について、聞けば、外部からの魔を防ぐため、との認識を語るのものである。シメ縄をはじめ左縄その他左マワリなど左の習俗に、キヨメ、魔バライ、浄化の呪術的機能がみられる。酒蔵に左縄を張りめぐらしていたことがかつてあったということを知ることもある。そのために、従来の指摘のように、左の文化的意味を問題とするのみならず、左の習俗の呪術的機能を十分に検討しなくてはならないのである。左の習俗をみるとき、そのような呪術的機能を果たしてもいるのであって、そのような中に、従来の右——左の象徴的二元論にみるように、左の文化的意味を、悪とか、不祝儀とか、不浄とか、縁起が悪い、などとすることにとどまることなく、左が、神祭り、また、祝儀にかかわり、縁起が良いことにもかかわって呪術的機能を果たしてもいることを看過してはならないのである。

このように、左の習俗に魔バライの呪術的機能が付与されていることが明らかなのであるが、そのような左が、世俗的生活活動における右との対置において、右のサカサであ

るということにその呪術的機能を認識していることがうかがわれる。

つまり、世俗性を象徴する右との対置における左の呪術・宗教性(右=世俗性、左=呪術・宗教性の二項対立)ということがいえるのである。

サカサの呪力ということは、左の習俗に限らず、たとえば、病気治療、雨乞いの儀礼などに際して、通常では禁止されている卑猥な歌を歌ったり、卑猥なしぐさをするのが認められ、さらには、奨励されてさえしている(Evans-Pritchard 1929) といったことなどにも示されている。通常では禁じられている卑猥な歌を歌ったり、卑猥な行動をあえてサカサに積極的に起こすことによって対処し、病気の状態から病気が治癒し健康な状態のサカサの状態を生み出すといったことなどにもサカサの呪力が想定される。

わが国において、不漁のとき、常日頃は船に乗せない女性をサカサに積極的に船に乗せ騒がせて豊漁を願うこと(新谷 1987 : 162) などにも、サカサの呪力ということは知られる事実である。進水式に際して、通常は船に乗せない女性を、サカサに、船に乗せたり、船に触らせたり、積極的に女性にかかわりを持たせる事実に関して、基本的に同じ視点からの解釈が可能であろう。その事実は、各地の漁村において知られることであるが、文献から一例を挙げておけば、たとえば、亀山慶一は、佐渡の鷺崎、小田、若狭の小浜など、日本各地の事実に基づき、「漁撈に赴く船に女性が乗ることを忌む伝承は広範に分布するとしても、特殊な場合、とくに船下ろし(進水式)に際しては、反対に、普通は忌まれる女性をわざわざ新造船に乗せたり触らせたりして、女性の霊力によって航海の安全や大漁を願い、船に弾みをつける習俗も広く見られる」(亀山 1992 : 101) と述べ、「こうした背反する伝承をどのように解釈すべきか」(亀山 1992 : 102) と問題を提起している。病気——健康、不漁——豊漁、などといったサカサの状態を生み出すために、常日頃では禁じられていることをあえてサカサにおこなうことによって対処しているとみなしう

るのかもしれないのである。

左の習俗の解釈に関しても、そのような視点からの解釈が可能なのかもしれない。

古野清人は、Nyoro 族において、占い師が占いに際して左手を使用することに関して、「右手は優越しているのであるから、当然占い師は右手を用いるはずである」(古野 1972b : 38) と考えられるのに、占い師が占いに際して右手に劣り下位で嫌われてさえしている左手を使用していることの解釈の重要性を指摘し、「ウガンダのニオロ族では左手は下位で嫌われているが、人々がいろいろの苦難を解決して貰うために依頼する占い師はしたがってよい活動をしなければならないが、彼は占いの貝類を右手でなくて左手で投げて占う。このことは理論上の課題を提起している」(古野 1972b : 38) と記している。通常、そのような場合、古野が述べるように、優越している右手を使用するはずと思われるのに、あえて、サカサに、左手を使用しているのである。そこに、サカサの呪力、ということが想定されるように思われる。そのことに関連して、Evans-Pritchard が Nuer 族における左手の使用にかかわって述べる「同種療法 (similia similibus curantur、毒は毒をもって制するといったこと)」(Needham (ed.) 1973 : 107, note 13) ということが想起される。

それは、母牛が子牛を生んだ後、後産が下りなくて苦しんでいるとき、左利きの人物に依頼して(つまり、左手で)草の輪を母牛の左の角に掛けて後産が下りなくて苦しんでいる状態を直し楽にしてやるという Nuer 族の習俗について述べていることであるが、Nuer 族において、左は「死や悪と同一視」(Evans-Pritchard 1956、訳書上 266)され、吉——凶の対置でいえば「凶の側」(Evans-Pritchard 1956、訳書上 271)であり、「左は死と不幸を表わし、右は生命と繁栄を表わして」(Evans-Pritchard 1956、訳書上 283)おり、そのような場合、当然、右手を使用するはずと思われるのに、実際は、左手を使用しているのである。

つまり、あえて、サカサの事実をおこなう

ことによって、サカサの状態の事態の好転を願っているということも考えられる。

そのような事実のほか、たとえば、西アフリカ・ガーナの LoWiili 族において、左手は嫌われ不吉と認識されているにもかかわらず、呪薬を左手で混ぜている (Goody 1962 : 111)。このような場合、嫌われ不吉と認識している左手を使用するとは考えられないと思われるのであるが、実際は、左手を使用しているのである。

このような事実に、サカサの呪力としての左の習俗の呪術的機能の「人類共通の文化的仕掛け」(山内昶使用の語句。山内 2000 : 205)を求めることができるのかもしれないのである。私は、このように、サカサの呪力、ということ述べるが、吉田は、「反秩序の呪力」(吉田 1976 : 77)、と記している。

そのような左の習俗の「文化的仕掛け」は、左の呪術的機能が認められる日本文化を含めて世界各地の文化についてかなりな普遍性をもっていいうることなのかもしれないのである。つまり、山内のいう「人類共通の文化的仕掛け」としての左の習俗ということである。その点、山内は、「右優位の日常秩序がひっくりかえり、左上位の現象が現れる事例は非常に多い。程度の差こそあれ、人類共通の文化的仕掛けだといってよいかと思われる」(山内 2000 : 204-205) と述べている。

そして、そのような「文化的仕掛け」の前提として、日本文化についても指摘される「聖」——「俗」: 「左」——「右」の二項対立が考えられるように思われる。

鳥越憲三郎によれば、Toradja 族において、日本文化におけると同様に、常日頃使用する縄が右ナイであるのに対し、宗教儀礼に使用する縄は左ナイであるという (鳥越 1994 : 12)。また、家の新築祝いの儀礼に際して左マワリにまわるということである (鳥越 1994 : 12)。さらに、その Toradja 族において、儀礼に際して、椰子の葉の右側をおとし、左側を使用するということでもある (鳥越 1994 : 12)。Kruyt によれば、Toradja 族において、右が生にかかわり、左は死にかかわっ

ているというが (Kruyt 1941, Needham (ed.) 1973 : 81, 83, 84)、Toradja 族における左の習俗は、前述のように、稲束の収穫後、米の栄養的価値を奪う魔を無害化するために、左の肘で稲束をつつくというように、魔バライのための左の習俗もみられるのである (Needham (ed.) 1973 : 86)。また、Vogt によれば、メキシコ・チアパス高地のシナカンタンのイロル (祭司、呪医) が常にその左手に祭司・呪医のシンボルとしての杖を持つということである (Vogt 1969 : 417)。吉田も Vogt の論述にふれ、「シナカンタンの呪医になる者は、聖山で神から治療法を習ったのち、低地へ行って竹を切り、それを杖として自分の左手に持ち帰り、以後左手に持つ竹の杖を呪医のシンボルとする」(吉田 1984 : 101) 「メキシコ南部チアパス高地のシナカンタン (Zinacantan) における祭司であり呪医でもある『イロル (h' ilol)』は竹の杖を常に左手に持ち、これをイロルのシンボルとしている」(吉田 1984 : 223) と記している。アフリカ・ケニアの Meru 族において、世俗的 (政治的) リーダーが右手を使用するのに対して、祭司は、儀礼で、左手を使用し、同・ウガンダの Nyoro 族で、占い師が、占いに際して、右手に劣り嫌われてさえしている左手を使用するというのであった (Needham 1960, 1967。ともに、Needham (ed.) 1973 に収録)。前に述べたように、Evans-Pritchard によれば、Nuer 族において、子牛を生んだ母牛が後産が下りなくて苦しんでいるとき、左利きの人物に依頼して (つまり、左手で) 草の輪を母牛の左の角にかけて楽にさせてやるということであった (Evans-Pritchard 1953, Needham (ed.) 1973 に収録)。そのことを、Evans-Pritchard は、「同種療法 (similia similibus curantur)」と述べていた (Needham (ed.) 1973 : 107 note13)。このこともすでに記したことであるが、わが国において、不漁のとき、通常では船に乗せない女性を、あえて、そのサカサに、積極的に船に乗せ、騒がせることによって、豊漁を願うということもあった。女性はケガレているとの観念の故に、通常は船に乗せないのに、不漁

を豊漁に転化するために、通常乗船を禁じられている女性をあえてサカサに船に乗せ、豊漁を願うのである。そのことは、病氣治癒などに際して、常日頃は禁じられている卑猥な歌を歌ったり、卑猥な動作をあえてすること同様であろう。まさに、サカサの呪力、ということが想定される。西アフリカ・ガーナの LoWiili 族において、左利きは嫌われ左手は不吉と認識されているのに、左手で呪薬を混ぜ (Goody 1962 : 111)、同じ西アフリカの Bambara 族で、「雨期の前の田畑にまず肥料を施している期間中は、大地の汚れを消し去るために、農民は自分の左手でくわを持ち3度耕す。その後、収穫期まで、農民は右手で働く」(Jahoda 1982, 訳書 359) ということであり、さらに、Turner は、中央アフリカ (のどの部族という具体的な記述はない) において、儀礼に際して、囲いを作り、境界を設けて、時計の針と反対方向、つまり、左マワリにまわることによって、聖なる空間を画定するという (Turner 1974, 訳書 309-310)。アジアにおける事実について述べれば、原英子によれば、古野が研究した台湾・高砂族 (高山族) の一部族アミ族で、高砂族で左は悪の観念で認識され悪を象徴しているにもかかわらず、病因など厄災を落とすために左マワリにまわるということであり (原 2000 : 58)、インドネシア・バリ島において、「田植えは必ず右手で行われなければならない。水田を耕す時も、右まわりの形」(吉田 1983 : 257) であるのに対し、祭りに際しての清めの儀式で、「海水に足をひたして左回り」(吉田 1983 : 118) にまわるということもある (バリ島における左の習俗は、かなり複雑である。くわしくは、吉田 1983 参照のこと)。インドにおいて、「左手の薬指で水をはねとばして、災厄よけの文句を唱える」(渡辺 1984 : 89) ということであり、また、結婚式に際して、新郎新婦が左足で土器を蹴り割って悪霊を払い、その後の幸福を願い、また、花婿・花嫁行列に出発する際に、「母親につきそわれて井戸を左周りに5回まわり、水の神に結婚の成功をいのる」(八木 1991 : 189) ということである。左の呪術的機能は

ヨーロッパの民俗文化についてもうかがわれ、谷口幸男・福嶋正純・福居和彦によれば(谷口・福嶋・福居 1981 : 233-234)、低地ザクセンの百姓家のできごとで、日頃櫃の中の穀物が少なくなるので、不審に思っていたところ、櫃の中にひきがえるが一匹入っていた。殺してやろうと右手に斧を持ち振り上げたところ、右手がしびれて動かない。左手に持ちかえるとひきがえるはたちまち姿を消したということである。また、魔女を捕えようとすれば、左手を使わねばならないということでもある(このひきがえるは、魔女であった)。ヨーロッパの文化にみる左の習俗に関して、山内昶は、「西洋でも結婚の踊りであるデロス島の鶴踊りでは、女神レートーの祭壇を左に回るのが古風だったし、元来狩の獲物や農作物の豊饒を祝う呪術的機能をもっていた^{フォーダンス}民俗舞踊も、日本の盆踊り同様、左旋が基本だった。もっともキリスト教の弾圧によって慶事には右繞、弔事に限って左繞という風に今では変わってしまったが、だからキリスト教以前の北欧では、新たに即位した王は統治する都市の周囲を左廻りに巡行し、魔法の守護の輪をめぐる習慣があったし、ドルイド教では、母なる聖地タラにある聖樹の回りを左旋しなければならなかった」(山内 2000 : 204) ということである。

現在、このような事例のすべてに、右——左の事実を詳細に知ることができないが、私が日本文化について指摘している「聖」——「俗」: 「左」——「右」という右——左の象徴的二項対立がかなりな普遍性をもって指摘することができそうであり、そして、左の呪術的機能がうかがわれ、その点に、比較(通)文化的に、左の習俗の「人類共通の文化的仕掛け」(山内昶の用語)——以上に述べたような意味におけるサカサの呪力——を導き出すことができるのかもしれないのである。吉田は、『『左』が呪力を持つという観念は広く諸民族にみられる』(吉田 1984 : 223) と述べているが、左の文化的意味を悪、不祝儀、不浄、縁起が悪い、などとする従来の右——左の象徴的二元論でなく、比較(通)文化的にかなりな普遍性を持ち基礎的事実

であるように思われる「聖」——「俗」: 「左」——「右」の二項対立をベースとして、左の習俗の呪術的機能の「人類共通の文化的仕掛け」——サカサの呪力——を導き出すことも一つの重要な研究課題であるように思われる。

私は、以上に述べたように、右の世俗性に対する左の呪術・宗教性の二項対立を世界各地の事例に認識しているのであるが、ネパールの次のような事例もあることを留意しておかなくてはならない。

それは、ネパールの少女の生き神様(クマリ)が王にティカ(ティカとは、「額につける赤い祝福の印」ビジャイ・マツラ著寺田鎮子訳 1994 : 13)を授ける場合の左手ということである。そのクマリに関して、上井久義は、「必ず左手で王にティカを付けなければならない」(上井 2007 : 104) と述べ、ビジャイ・マツラも、「国王は館にクマリを訪問して礼拝し、その左手からティカを額に受け」(ビジャイ・マツラ著寺田鎮子訳 1994 : 264) と記し、また、那谷敏郎も次のように記している(那谷 1977 : 66)。

「インドラ・ジャトラの祭りの時、王国のクマリは王に会う。王は生き神館^{クマリ・チョーク}にでかけ、金銭を献上する。クマリの足許に頭をさげる。クマリは座ったまま王を迎え、王の首に花飾りをかけ、王の額^{ひたい}にティカをする。ティカというのは、ヒンズー教徒の額に見るあの印のこと。但し、普通は右手指数本を使ってティカをするのに、この時、クマリは左手の指全部を使ってティカをおこなう。」

この引用文の中の、普通は、ということが何を意味するのか、種々問い合わせたのであったが、私の知人が彼の現地の友人に問い合わせてくれたその返答に、「一般のネワール人に対してはクマリは右手でティカをつけ、王様がクマリの館に来たときに見たのは、クマリが両手で押す様にティカを授け、王様だけでなく、王族の人にもそうした」(返答の文面から引用) ということである。

ネワールとは、クマリの民族のことである。このように、王様および王族に対しては、左手だけでなく、両手でという情報もあるのであるが、私が問題としている、普通は、ということの具体的内容として、それは、一般庶民、ということのようである。

つまり、一般庶民には右手であるのに対して、王様および王族には両手ないし左手でというようにとらえうると思われる。このように、王様・王族——一般庶民の対置において、左手——右手の問題を考察する必要がある場合もあることを留意しておくこともある。このクマリに関して、今後、さらに、十分に究められなければならない。このような事例もあることを記しておきたい。

なお、このように、王様および王族に対するクマリの左手ということがあるのであるが、ところが、関心の持たれることに、そのクマリを選ぶ基準の中に、「右のほうへカールしている硬い髪」(那谷 1977 : 54)「右にカールしたかたい巻き毛」(植島 2002 : 3)ということがあり、また、クマリは、「常に

右向きに渦を巻く法螺貝ほらがいを身につけていなければならない」(那谷 1977 : 67)ということもあるということである。さらに、祭りに際して「聖なるものに敬意を表す儀礼」(寺田 1989 : 8)として「三回右繞」(寺田 1989 : 8)する。少女がクマリになるためのイニシエーション儀礼において、「時計回り」(植島 2002 : 8)つまり右マワリにまわる。ところが、「クマリは、その力の秘められた左手で(王に)ティカを与え」(寺田 1989 : 14)るのである。

このように、クマリを選ぶ基準の中に右が重視され、クマリが身につける法螺貝が右向きに渦を巻くものであり、また、祭りに際して右マワリであることなど、右が重視されている中に、王様および王族に対してクマリの左手が重視されているということが興味深い。左手の特別な意味合いに関心が持たれる。ネパール文化の場合、民族の違い、仏教とヒンズー教の問題(クマリは「仏教徒(少数派)のサキャ・カーストから選ばれ、国王はヒン

ドゥー教」。植島 2002 : 1)、カーストの違いによる習俗の違いの如何、王国のクマリ(ロイヤル・クマリ)に対して、里のクマリ(ローカル・クマリ)はどうかといったこと、また、世界各地の民族誌にみられるとされている「聖性と女性と左手という結びつき」(吉田 1984 : 224)がもしネパールの場合にもみられるのであれば、右と男性、左と女性とのかかわりということも重要な検討課題となる。その場合、上述の「右のほうへカールしている硬い髪」ということがクマリを選ぶ基準の一つとされていること、また、クマリは常に「右向きに渦を巻く法螺貝」を身につけていること、儀礼に際しての右マワリといった場合などの右とのかかわりをいかに理解するかということが問題となる。

ネパールのクマリの左手の問題は、いろいろな視点から、今後、十分に、究められなければならない。

以上、要するに、右——左の象徴的二元論の研究にかかわって、従来の指摘のように、「右」——「左」:「善」——「悪」、「祝儀」——「不祝儀」、「浄」——「不浄」、「縁起が良い」——「縁起が悪い」、などといった右——左の象徴的二項対立の研究(にみる左の文化的意味の指摘)ということも重要な研究課題ではあろうが、さらに、左の呪術的機能の「人類共通の文化的仕掛け」(山内和使用の語句)を追求することも重要な研究課題の一つであろうということ、最後に、改めて、述べておきたい。

参考文献

- Beattie, J.
1968 Aspects of Nyoro Symbolism
*Africa*38
- Evans-Pritchard, E. E.
1929 Some Collective Expressions of
Obscenity in Africa
E. E. Evans-Pritchard : *The
Position of Women in Primitive
Societies and Other Essays in
Social Anthropology* 1965 Faber

研究ノート (特別寄稿): 「二項対立のあらかじめ作られた図式」
(prefabricated schema of binary opposition) (松永)

- and Faber LTD 所収
- 1953 Nuer Spear Symbolism
Anthropological Quarterly 1
Needham (ed.) 1973 に収録
- 1956 *Nuer Religion*, the Clarendon
Press (E. E. エヴァンス^ス = プリ
チャード著向井元子訳『ヌアー族の
宗教』上・下 平凡社 1995年)
- 古野清人
- 1972a 『高砂族の祭儀生活』古野清人著作
集1 三一書房
- 1972b 『原始文化の探求』古野清人著作
集4 三一書房
- Goody, J.
- 1962 *Death, Property and the Ancestors*
—*A Study of the Mortuary*
Customs of the LoDagaa of West
Africa— Stanford University
Press
- 原英子
- 2000 『台湾アミ族の宗教世界』九州大学
出版会
- Hertz, R.
- 1909 *La Prééminence de la main*
droite: étude sur la polarité
religieuse *Revue philosophique*
68 英訳 *The Pre-eminence of the*
Right Hand: A Study in Religious
Polarity (translated by Rodney
Needham) in Robert Hertz: *Death*
and the Right Hand (translated by
Rodney and Claudia Needham, with
an Introduction by E. E. Evans
—Pritchard Cohen & West 1960
吉田禎吾訳「右手の優越——宗教的
両極性の研究——」吉田禎吾・他・
訳『右手の優越——宗教的両極性の
研究——』垣内出版 1980、ちくま
学芸文庫 2001、筑摩書房)
- 比嘉康雄
- 1989 「神々の古層」(1)『女が男を守る
クニ』久高島の年中行事 [1] ニラ
イ社
- ビジャイ・マツラ著寺田鎮子訳
- 1994 『神の乙女クマリ』 新宿書房
- Jahoda, G.
- 1982 *Psychology and Anthropology —*
A Psychological Perspective —
— Academic Press Limited (G. ヤ
ホダ著野村昭訳『心理学と人類学—
心理学の立場から—』北大路書房
1992年)
- 桂井和雄
- 1973 「左巻きのエビズルとノブドウ」『俗
信の民俗』岩崎美術社
- 亀山慶一
- 1992 「漁業 女の靈力で弾む船」『歴史読
本』五月号 新人物往来社
- 嘉陽妙子
- 1987 「久高島の年中行事と神女の服装」
『沖縄民俗研究』7 沖縄民俗研究
会
- Kruyt, Alb. C.
- 1941 *Right and Left in Central Celebes*
(*Rechts en Links bij de Bewoners*
van Midden-Celebes) Needham (ed.)
1973 に収録
- 松永和人
- 2001 『新版 左手のシンボリズム——
「聖」——「俗」: 「左」——「右」
の二項対置の認識の重要性—』九
州大学出版会
- 村武精一
- 1984 『祭祀空間の構造——社会人類学ノ
ート——』東京大学出版会
- 長島信弘
- 1977 「遠似値への接近——右と左の象徴
的分類に関するニードムの所論を
めぐって——」一橋大学一橋学会編
集『一橋論叢』第77巻第3号
- 波平恵美子
- 1984 『ケガレの構造』青土社
- 那谷敏郎
- 1977 『ネパールの生神様』平凡社
- Needham, R.
- 1960 *The Left Hand of the Mugwe: An*
Analytical Note on the Structure
of Meru Symbolism *Africa* 30

研究ノート (特別寄稿): 「二項対立のあらかじめ作られた図式」
(prefabricated schema of binary opposition) (松永)

- Needham(ed.) 1973 に収録
1967 Right and Left in Nyoro Symbolic Classification *Africa*37
Needham(ed.) 1973 に収録
1973 (ed.) *Right & Left : Essays on Dual Symbolic Classification*
The University of Chicago Press
1979 *Symbolic Classification* Goodyear Publishing Company 吉田禎吾・白川琢磨訳『象徴的分類』、1993年、みすず書房
1987 *Counterpoints* (第六章 complementarity) University of California Press
- 桜井満編
1979 『神の島の祭り——イザイホー——』(日本の民俗学シリーズ4) 雄山閣出版
- 新谷尚紀
1987 『ケガレからカミへ』木耳社
谷口幸男・福嶋正純・福居和彦
1981 『ヨーロッパの森から——ドイツ民俗誌——』(NHKブックス 397) 日本放送出版協会
- 寺田鎮子
1989 『インドラ・ジャトラ——ネパールの女神と柱立て——』ヴィジュアルフォークロア
- 鳥越憲三郎
1994 「トラジャ族の方位観」日本生活文化史学会『生活文化史』26
- Turner, V. W.
1974 *Dramas, Fields, and Metaphors — Symbolic Action in Human Society —* Cornell University Press. V. W. ターナー著梶原景昭訳『象徴と社会』紀伊國屋書店 1981年
- 植島啓司
2002 『ネパールにおける生き神信仰の研究』(平成11年度—平成12年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書)
- 上井久義
2007 「生き神様の左手」上井久義著作集第七巻『民俗学への誘い』所収
- Vogt, E. Z.
1969 *Zinacantan : A Maya Community in the Highlands of Chiapas*
The Belknap Press of Harvard University Press
- 渡辺照宏
1984 (1959)『死後の世界』(岩波新書) 岩波書店
- 八木祐子
1991 「儀礼・職能カースト・女性——北インド農村における通過儀礼と吉・凶の観念——」『民族学研究』56/2
- 山口昌男
2000 『文化と両義性』 岩波書店
- 山内 昶
2000 「右と左の文化学」鈴木亨・松村昌家編『人文科学の諸相』大手前大学
- 柳田国男
1963 『分類祭祀習俗語彙』 角川書店
- 吉田禎吾
1976 『魔性の文化誌』 研究社
1979 (編著)『漁村の社会人類学的研究——壺岐勝本浦の変容——』 東京大学出版会
1983 『宗教と世界観——文化人類学的考察——』九州大学出版会
(「バリ村落の宗教と世界観」、「バリ島における呪術と象徴的世界」、「バリ村落の儀礼と象徴」、「象徴的分類と比較研究——ロドニー・ニーダムの所論をめぐって——」)
1984 『宗教人類学』東京大学出版会
2001 (訳) ロベール・エルツ著吉田禎吾・他・訳『右手の優越——宗教的両極性の研究——』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房(旧訳書 垣内出版 1980年)